

大都市における子どもの遊び空間

—世田谷区を事例として—

宍戸 朋子

我が国の子どもをとりまく環境は悪化している。都市化の進行による遊び場の減少、塾や習い事の増加による自由時間や仲間の減少などが原因である。

本論文では、住宅都市である世田谷区を対象として、世田谷区の地域特性を市街化の進行から考察し、それをふまえて、遊び場となりうるスペースの現状を把握し、アンケートの結果をもとに子どもの遊び環境、特に遊び空間について追求した。

子どもの遊び場の問題は、日本の都市化の歴史と関連があり、また、都市計画、社会福祉、教育などとも関連している。特に都市化は、野原、空地などの自然空間を減少させ、自動車の普及は、道を単なる交通のための道路に変えていった。このために子どもの遊び場は減少し、その減少に対応して、地域社会に公園、児童館などの施設空間ができていく。例えば、東京23区の都市公園の整備・発達は、都市化に対応したかたちで拡大している。ただし、現状では、都心地域、山手地域、下町地域では、すでに量的に公園を整備していくことは困難になっている。しかし、子どもの屋外の遊び場は、自然空間が減少している現状にあって、地域の施設空間となっているのである。

世田谷区は、都心近くの市街化のはやかった地域と都心から遠くの地域では、人口の動向や土地利用状況が異なり、2つの市街化の状況を呈している。それに伴って、世田谷区の遊び場資源の現状は異なっている。

公園は、市街化の最も進んでいない砧地域の整備は遅れているが、逆に市街化のはやかった地域では、公園を新たに確保することは困難になっている。しかし、既存の公園の活用で、子どもの自由な遊び環境を配慮したプレーパークが開設され

ていて、公園の質の向上がはかられている。また、遊び場資源の豊かな市街化されていない地域では、施設空間である公園の、子どもの遊び場としての比重は低くなる。

神社・寺は、市街化の進んでいる中で、例外的にそれ程影響を受けずに残ったオープンスペースである。オープンスペースの少ない市街化のはやかった地域では、貴重な子どもの遊び場になっている。

世田谷区を流れる中小河川は、暗渠化され、開渠のものも高い護岸にはさまれるなどで遊び場としての機能を果たさなくなっている。しかし、水のある空間は、子どもにとって、人気のある遊び場であり、自然空間の比較的残っている地域でも、その遊び場としての利用度は高い。

道路率をみると、砧地域の道路率が低い。市街化のはやかった地域では、道路率も高く、格子状でパターンが細かい。一方、市街化されていないところは、整備がすすんでいない。遊び場資源の少ない地域では、遊び場としてあげられることが多いが、子どもの冒険心、探究心、創造性を発揮できるのは、迷路のような土の道であろう。

遊び環境は、遊び空間、遊び時間、遊び仲間が、互いに影響しあってつくっている。しかし、遊び時間、遊び仲間は、地域の市街化の進行とかわりがなかった。

遊び環境は、多くの問題を抱えている。したがって、遊び環境が向上するには、遊び仲間のみが向上すればよいというわけではない。しかし、地域社会と子どもの遊びは深くかかわっており、今後、失われた遊び場がどのように復権していくか注目してゆきたい。